

子ども時代の組織キャンプ経験に関する自伝的記憶(1) —記憶特性質問紙を用いた検討—

The Autobiographical Memories of Organized Camp during Childhood —Using the Camp Memory Characteristics Questionnaire—

○佐藤冬果 (TOEL) 井村仁 (筑波大学)

キーワード：自伝的記憶、自伝的推論、記憶特性、組織キャンプ

1. はじめに

人は過去の出来事の記憶を単に想起するだけでなく、想起された出来事を解釈・評価したり、過去の記憶を互いに結び付けたり、過去の記憶と現在の自己を結び付けたりする。こうした内省的思考過程である自伝的推論を経て、出来事のエピソード記憶は自己を支える自伝的記憶となる¹⁾。

子ども時代の組織キャンプ経験は、直後の参加者に影響を与えるに留まらず、その後の人生においてキャンプの記憶が想起、解釈されるなかで影響を与え続けることが考えられる。そこで、子ども時代の組織キャンプ経験が参加者に与える長期的な影響を明らかにすることを目的に、キャンプの記憶の内容とその記憶特性(課題 1)、及び自伝的推論の程度とその内容(課題 2)を検討した。

2. 研究方法

2.1. 研究対象

子ども時代(幼児期～18歳)に組織キャンプへの参加経験をもつ19歳以上の者を対象とした。

2.2. 調査内容

先行研究¹⁾²⁾を参考に、キャンプの記憶と自伝的推論(記述式)、記憶特性(19項目7件法)について問う質問紙を作成した。記憶特性項目は、リハーサル頻度、鮮明度、一貫性、再体験の感覚、身体感覚、感情、新奇性、自己との関連、重要性の9カテゴリー(表1)から成り、自己との関連、重要性の合計得点を自伝的推論得点とした。

2.3. 調査方法

インターネット上で回答可能なアンケートフォームを用い、2016年7月～9月にデータ収集をおこなった。有効回答は191件であった。

表1 記憶特性質問項目のカテゴリー分類と質問項目例

リハーサル頻度	この出来事が起こってから、そのことについて思い出したり考えたりした回数は、	1:まったくない～7:何度もある
鮮明度	この出来事の記憶は、	1:おおざっぱである～7:きわめて詳細である
一貫性	この出来事に続いて起きた出来事を	1:まったく覚えていない～7:はっきり覚えている
再体験の感覚	この出来事を思い出すと、再び体験しているような気持ちに、	1:まったくならない～7:強くなる
身体感覚	この出来事の記憶の中に五感(音や声、匂い、味覚、触覚)は、	1:まったく含まれていない～7:たくさん含まれている
感情	この出来事を体験した時の感情や気分は、	1:非常によくなかった～7:非常によかった
新奇性	この出来事の状態全体は、	1:非常にめずらしい～7:非常にありふれている
自己との関連	この出来事と今の自分との間につながりが、	1:まったく感じられない～7:強く感じられる
重要性	この出来事は、私にとって	1:まったく重要ではない～7:非常に重要である

3. 結果と考察

3.1. キャンプの記憶の内容と記憶特性(課題 1)

3.1.1. キャンプの記憶の内容

最も印象に残るキャンプの出来事に関する記述内容をプログラムの観点から整理すると、キャンプファイヤーや登山、野外炊事などのキャンプ特有の活動場面や生活場面が多く挙げられ、5群に分類された。また、改めて全回答を出来事の対象の観点から整理すると、仲間や指導者との交流、自然体験、そして達成体験等の自己に関する回答などの6群に分類された(回答数は表2)。

3.1.2. キャンプの記憶の記憶特性

1) キャンプの記憶の内容と記憶特性

全回答者の記憶特性得点についてカテゴリー毎に中間値(4.0)との差をt検定すると、リハーサル頻度、鮮明度、自己との関連において有意差はなく、感情、重要性は有意に高く、一貫性、再体験の感覚、身体感覚、新奇性は有意に低い結果となった(表2)。中でも感情得点の高さは、肯定的な感情を伴う出来事が多く回答されたことを、新奇性得点の低さは、「珍しい」と感じる出来事が多く回答されたことを表した。次に出来事の内容毎に検討すると、登山のゴールやキャンプ最終日等の「達成体験」はリハーサル頻度や鮮明度の得点が中間値と比較して有意に高かった(表2)。

表2 全回答者の記憶特性得点と年齢区分、記憶の内容との比較

	N	リハーサル 頻度	記憶特性 カテゴリー							自己との 関連	重要性	自伝的 推論
			鮮明度	一貫性	再体験の 感覚	身体感覚	感情	新奇性				
全回答者	191	M 3.85 SD 1.72	4.15 2.04	3.37 2.04	3.42 1.86	3.62 1.81	5.09 1.94	3.27 1.76	4.12 1.76	4.38 1.70	4.35 1.65	
中間値(4)との検定 t(190)=		1.19	1.40	4.29***	4.31***	2.92**	7.78***	5.70***	0.91	3.13**	2.90**	
年代区分	青年期	89	M 3.65 SD 1.70	4.10 2.15	3.48 2.15	3.37 1.90	3.29 1.69	4.94 1.94	3.42 1.71	3.82 1.86	4.04 1.77	4.01 1.73
	成人前期	62	M 3.95 SD 1.54	4.16 1.50	3.23 1.89	3.31 1.83	4.18 1.73	5.16 2.04	3.18 1.88	4.35 1.69	4.73 1.51	4.67 1.48
	成人期	40	M 4.15 SD 2.01	4.26 1.55	3.33 2.03	3.70 1.86	3.48 2.03	5.30 1.76	3.10 1.72	4.40 1.57	4.61 1.70	4.58 1.59
	年齢区分間分散分析 F(2,188)=		1.33	0.17	0.30	0.59	4.70**	0.53	0.57	2.39†	3.47*	3.54*
	***p<.001, **p<.01, *p<.05, †p<.10 太字:多重比較の結果、差が有意だった組み合わせ。											
	出来事の内容 対象分類	キャンプ ファイヤー	41	M 3.54 SD 1.86	4.12 1.59	3.54 2.12	3.49†	3.78 1.81	5.80***	3.41*	4.41 1.64	4.72**
登山		27	M 4.48 SD 1.64	4.66*	3.93 2.06	3.70 1.84	4.37 1.67	5.33**	2.41***	4.41 1.55	4.99**	4.90*
野外炊事		20	M 3.03† SD 1.68	3.30†	2.70**	2.15***	2.60**	4.60 1.70	3.20†	3.20†	3.33 1.80	3.31†
その他 野外活動		39	M 3.59† SD 1.44	3.97 1.27	3.18*	3.41*	3.59 1.62	4.46 2.00	3.85 1.83	3.49†	3.82 1.46	3.76 1.46
その他 生活全般		64	M 4.20 SD 1.72	4.33†	3.34*	3.66	3.53†	5.06***	3.22**	4.47*	4.59**	4.58**
仲間		41	M 4.15 SD 1.75	4.29 1.48	3.46 2.06	3.93 1.78	3.59 1.84	5.20***	2.83***	4.46*	4.62*	4.60*
自然・火		36	M 3.81 SD 1.76	4.43 1.61	3.11*	3.64	3.86	4.75*	3.17*	4.06	4.38	4.33
指導者		29	M 4.15 SD 1.53	4.54†	3.55	3.62	3.86	5.62***	3.97	4.28	5.05***	4.94***
自己		17	M 3.89 SD 1.71	4.44 1.33	3.65 2.37	2.94*	4.18	4.47	3.00†	4.88*	4.43	4.50
達成体験 (自己)		16	M 5.19** SD 1.15	4.66*	4.25	4.31	4.69	6.13***	2.94*	4.44	5.42***	5.28***
プログラム		52	M 3.12*** SD 1.64	3.38**	3.00***	2.63***	2.83***	4.83**	3.50*	3.44*	3.50*	3.49*

***p<.001, **p<.01, *p<.05, †p<.10 太字:検定の結果、評定の中間値(4.0)との間に有意差がみられた項目。下線付太字は有意に低い得点だったことを示す。

2) 現在の年齢と記憶特性

年齢区分ごとに記憶特性を比較すると、青年期群は成人前期群と比べ、身体感覚と重要性の得点が有意に低く、青年期群の多くが五感を含まない単純なエピソード記憶に関する回答であったことが伺えた。一方でリハーサル頻度と鮮明度は3群間で有意差はみられず、キャンプ経験から年月が経過していても、その記憶を想起する頻度や鮮明さは低下しないことが示された(表2)。

3.2. 自伝的推論の程度とその内容(課題2)

3.2.1. 自伝的推論の程度

1) キャンプの記憶の内容と自伝的推論

自伝的推論得点と出来事の内容の関連を検討すると、登山や指導者との関わり、達成体験の記憶は有意に自伝的推論得点が高い一方、「野外炊事をした」など、プログラム単体の記憶は低い得点となる傾向がみられた(表2)。

2) 現在の年齢と自伝的推論

自伝的推論得点を年齢区分間で多重比較すると、成人前期は青年期と比べて5%水準で有意に得点が高く、成人期は青年期と比べて得点が高い傾向がみられ、年齢を重ねると自伝的推論が促進されるという先行研究の知見とおおよそ一致した。

3.2.2. 自伝的推論の内容

自伝的推論に関する記述(複数回答、計365件)を分類すると、約2割の回答者にとっては「いい思い出」以上の意味を持たないエピソード記憶として保持されていた。一方で他の8割の回答者の記述は自己への影響、対人関係に関する影響、自然への認識に関する影響、野外活動への興味関心に関する影響、進路や職業選択への影響やその他の7群に分類され、自己・他者・自然の三大観点を中心に多様な影響が認識されていた(表3)。

4. 結論

(1) キャンプファイヤーや登山、野外炊事などの野外活動場面や生活場面、仲間・指導者との交流や自然に触れた場面など、様々な出来事が参加者の記憶に残る。

(2) 指導者との関わりや達成体験の記憶は「この出来事から何かを学んだ」「この出来事は私に影響を与えた」などの自伝的推論に繋がりがやすい。

(3) キャンプによる影響は、年齢を重ねた後に認識され、意味づけされる傾向にある。

(4) 子ども時代に組織キャンプへ参加した者のうち約8割が、現在でも何らかの影響を受けていると意味づけており、その内容は自己・他者・自然の観点を中心に多岐にわたる。

引用参考文献

1) 佐藤浩一(2007): 自伝的記憶の構造と機能、新潟大学大学院現代社会文化研究科、博士論文。

2) Takahashi, M. & Shimizu, H. (2007): Do you remember the day of your graduation ceremony from junior high school?: A factor structure of the Memory Characteristics Questionnaire, Japanese Psychological Research, 49(4):275-281.

表3 自伝的推論に関する自由記述の分類と回答件数

A.自己:95名(49.7%),150件 行動・性格・習慣が肯定的に変化した(47件)、 何らかの価値観や考え方を学んだ(36件)、 人生を支える体験となった(22件)など	D.野外活動:21名(11.0%),21件 野外活動への興味関心が向上した(15件)、 野外活動技術を習得した(4件)など
B.他者:38名(19.9%),49件 チームワークの態度を学んだ(25件)、 人間関係の楽しさを知った(9件)など	E.進路や職業選択への影響:26名(13.6%),26件 進路や職業選択に影響を与えた(26件)
C.自然環境:39名(20.4%),46件 自然環境への興味関心が向上した(19件)、 自然観が築かれた(11件)など	F.その他:35名(18.3%),40件 自分の子どもにも経験させたいと思うようになった(7件)、 仲間との共通の思い出を得た(5件)など
	G.印象・思い出:33名(17.3%),33件 その場の印象が強かったために覚えている、 単なる思い出(33件)